



National Institute of Technology, Hiroshima College Library

図書館だより 第53号

2020年（令和2年）3月31日
独立行政法人国立高等専門学校機構
広島商船高等専門学校



廃線前の三江線所木駅（2018年3月撮影）

— 目 次 —

第21回校内作文・表現コンクール審査結果……………	(2)
第21回校内作文・表現コンクール入賞作品	
最優秀賞……………	(3)
優秀賞……………	(4)
特別賞……………	(5)
<トピックス>	
ビブリオバトル in 広島商船を行いました……………	(8)
第11回広島商船ミニコンサートを開催……………	(8)
編集後記……………	(8)



ミニコンサート（2019年12月7日）

第21回校内作文・表現コンクール審査結果



受賞区分	作品タイトル	学 科	学年	氏 名
最優秀賞	ヒマラヤの子ども	流通情報工学科	3年	角藤晴華
	この一冊から得られたもの	流通情報工学科	1年	村上夏一
優 秀 賞	今やろう	商 船 学 科	2年	小池なずな
特 別 賞	家族の形	電子制御工学科	3年	森 洋基
	命の優劣	流通情報工学科	1年	行友光葵
	「ニワトリは一度だけ飛べる」を読んで	流通情報工学科	1年	松井映樹
佳 作	自分の道	流通情報工学科	2年	井上爽椰
	人と接するには	商 船 学 科	3年	内山栄佑
	作者の狙い	商 船 学 科	1年	近藤十希
	もったいない	流通情報工学科	3年	中島偉吹
	車いす記者奮戦記を読んで	電子制御工学科	3年	小田切拓磨
入 選	感動	電子制御工学科	1年	柿原夏音
	答えのない森を歩く	商 船 学 科	1年	鞍田柚菜
	“ネコはなぜ生きる”を読んで	電子制御工学科	2年	小西洸生
	一切なりゆき～樹木希林のことば～	流通情報工学科	2年	森重つばさ
	読書感想文	電子制御工学科	2年	南原 翔
	「ホセ・ムヒカ」の本を読んで思ったこと	商 船 学 科	2年	安井 蓮
	星の旅人	商 船 学 科	3年	山野 薫
	「涼宮ハルヒの憂鬱」を読んで	商 船 学 科	1年	嶋津朋子
	本田健『大富豪からの手紙』	商 船 学 科	1年	小林大翼

入賞作品

ヒマラヤの子ども



流通情報工学科3年 角 藤 晴 華

私が初めてこの本を見たとき、サブタイトルの「見捨てられた子どもたち」という言葉に目が引きつけられた。

私はこの夏、フィリピンに2週間ほどの語学研修に行った。そこで私は学校にも行かず道端でお金を下さいと声をかける小さい子供に出会った。ストリートチルドレンである。私は彼らのような子供がヒマラヤにもいるのかと思い表紙をめくった。

この本は、私に日本という国がどれだけ恵まれているのか、そして世界には日本とは違い多くの人々が貧困に今もなお苦しんでいると教えた。日本が世界の中で裕福であることは私も知っていた。しかし、これほどまでに日本と世界には大きな差があり恵まれた環境であったとは知らなかった。

私がこの本から得たものは2つある。今の状況すべてに感謝の心を忘れないこと。そして、世界について知り日本を客観的な立場で見ることの重要性だ。ヒマラヤはネパールという国にある。ネパールでは今もなおカースト制度(身分制度)が残っており、差別されるのが当たり前である。また、ヒンドゥー教では女性の地位が低く生まれてくることでさえ罪となる。同じ女性として、違う土地に生まれる、その違いだけで自分は悪となり人から憎まれなければならないのかと思った。しかし、ヒンドゥー教徒は世界で最も多い。宗教とはいえ、理

不尽に女性が傷つくのは私には理解できない。私は、当たり前のように暮して来た日常がどれほど幸せで、世界には私のように暮せず苦しむ人が多くいることを知り、感謝すべきことだと考えた。

では、彼らを救うには何が必要なのだろう。そこで作者は、一時的な手助けのボランティアではなく“教育”

こそ必要だろうと述べている。思えば、私たちも字の書き方言葉の話し方、すべて学校で教わったのではないか。ここで私は学校教育の大切さを再確認した。しかし、子供の学びたいという向上心はあるが、親が協力的ではなかったりと多くの壁が立ちはだかった。日本では考えられないようなことが問題となる。

ネパールや私がフィリピンで出会った子供たちだけでなく、その他にも多くの国や地域で同じ状況で苦しむ子供たちがいる。今の私に必要なのは、それを知っ

たうえで自分の日常をどう変えていくかということだ。まずは、何気なく過ごしている夏休みだが、世界にはそれすら得られていない子供たちがいる。私はこの夏休みを当たり前と思わずに無駄に過ごさないような時間にしたい。向上心を忘れず、今の状況に感謝することで将来に繋げていきたいと思う。

私の中でフィリピンに行った経験で満足して、それ以後がなくなっていたので、これからの生活を考え直したい。



この一冊から得られたもの

流通情報工学科1年 村 上 夏 一

この本は、フロイト、ユングと並び、「心理学の三大巨頭」と呼ばれるアルフレッド・アドラーの思想である、「アドラー心理学」について、青年と哲人の対話篇という物語形式を用いてまとめた一冊です。欧米で絶大な支持を誇るアドラー心理学は、どうすれば人

は幸せに生きることができるのかという哲学的に問いに対して、きわめてシンプルかつ具体的な答えを提示する考え方であり、自己啓発の源流とも呼ばれています。

この一冊を読む前と読んだ後では自分の今までの考え方が根底から覆されるほど衝撃的で、今まで自分に

無かったものを与えてくれるような内容でした。中学とはがらりと変わった高専で生活していく中で、僕自身、周りとあまり馴染めず、対人関係に対して悩みを抱えていました。でもこの本を読んで、今まで自分が深く考えていた悩みが一気に晴れるような気分になりました。この本を読んで、特に印象に残った部分が三つありました。

一つ目は、アドラー心理学において、フロイト的な「原因論」を否定し、全ては「目的論」からなるという事です。自分達の現在や未来は全て過去の出来事によって決定済みであり、動かしようのないものではなく、経験に与える意味によって現在の自分を決定するという発想は、今までの自分にはなかった事だと思いました。原因論、因果律がないと考えれば、人は今からでも変わることができる。そのためアドラーは性格の事を「ライフスタイル」と呼んでいます。確かに、性格はなかなか急には変え難いものだけれど、それが自身で選んだライフスタイルなのであれば自分自身が変わろうとするのも容易だと思いました。

二つ目は、「自分の課題」と「他者の課題」を区別することです。その判断基準は、作中で哲人が、「その選択によってもたらされる結末を最終的に引き受けるのは誰かによって判断すべき」と語っていました。また、作中に「お前の顔を気にしているのはお前だけ」という言葉もありました。他人から嫌われまい、変な人と思われたくないとふるまっても、自分の事を

他者がどう思うのかはあくまで、「他者の課題」であり、「自分の課題」ではない。この考え方をすれば、周りを気にしすぎずに生活ができるなど感銘を受けました。対人関係の悩みは、課題の分離をし、「他者の課題に介入せず自分の課題にも誰一人として介入させない」ようにし、自分の信じる最善の道を選ぶことで解消できるということが学びました。

三つ目は、幸せに生きるということは、ここに居てもいいんだよ、と所属感を得て共同体の中で貢献感を持つことであるという事です。貢献感を得るためには、「自己受容」すなわち肯定的なあきらめを持ってありのままの自分を認め、「他者信頼」すなわち全ての人を敵ではなく、味方と見て信用ではなく信頼して、「他者貢献」、見返りを求めず他人に何を与えることができるかを考える三つの要素が必要であるということが、作中では語られていました。

この三つの要素を指針として生活していけば、必要以上に自分を責めなくなるし、他人の事で嫌な思いもしたり対人関係において悲観的ではなくなるなどとても納得のいく考え方だと思いました。

この本を読んでから、自分が深刻に考えていた対人関係の悩みが嘘のように解消されたように思えました。作中の青年と哲人の対話から得られた考え方はとても自分にとって大きなものであり、世界が希望的なものに見えるなど感じました。まだまだ語り尽せないほど素晴らしいことがこの本には綴られていると思うのでぜひ一度読んで欲しいです。



今やろう



「明日やろう」という言葉を言い続けて、気がつけば長い夏休みも最終日になっていた。本当は八月中に読書感想文を書き上げるつもりだったんだ。私はいつも「ああすれば良かった」、「こうするつもりだった」と、過ぎた時間を後になってから後悔する。後悔しても過ぎた時間は帰って来ないし、後悔する暇があるなら今やれば良い話なのに。

商船学科2年 小池 なずな

私がこの本に出会ったのは福岡での個人面談の日だ。九州の田舎に住んでいるため、博多という都会の町にはめったに行ったことがなく、人の多さに驚いた。しかし、どこの土地へ行っても本屋さんというのは落ち着く。オシャレなカフェや大きなショッピングセンターの数々、首が痛くなる程見あげるビル。田舎にはないものもいっぱい都会はもっている。本屋が落ち着

くのはきっと、田舎にも都会にも、どこに行っても変わらない様子で本屋さんがあるからだろうと私は思う。そして「青空のむこう」という本を手を取ったきっかけは、書店員オススメのコーナーにタイトルどおりのとても夏らしい青空の表紙で、帯には「63万部突破のベストセラー、待望の文庫化！」と、書かれていて、読書感想文を書くのにぴったりだと思ったからだ。

この本は死んでしまった少年を主人公にして「死について」でもなく、「死後の世界について」でもなく、「この世界で生きることについて」の話だ。主人公ハリーは交通事故で死んでしまい〈死者の国〉へ行ってしまう。生きていた時にやり残したことがなければ〈彼方の青い世界〉に行けるのだが、ハリーは交通事故に遭う前に、姉のエギーとケンカをして、仲直りが出来ないまま死んでしまったため〈彼方の青い世界〉に行くことができなかった。最後はきちんと〈彼方の青い世界〉へ行けるのだが、もし私が本当に、誰かとても大切な人とケンカしたままで死んでしまって、この話のようにはいかず、〈彼方の青い世界〉には行けず〈死者の国〉をさまよっていたらどうだろう。きっと生きてきた日々を思い出し、ケンカして仲直りできないことをずっと後悔してじめじめし



ていると思う。しかし、たとえケンカしていなくても後悔はたくさんあるはずだ。なぜなら、もし私が昨日死んでいたら読書感想文を書き終わっていないことに後悔するからだ。大きな事でも小さな事でも「明日やろう」は後悔に繋がるひとつだと思う。何かのドラマで言っていた「明日やろうは馬鹿野郎」を思い出して本当にその通りだと思う。生きていたかったけど死んでしまった人や、今が辛くて死にたいと思う人、様々な人がこの世界にはたくさんいる。生や死についての考えもそれぞれだが、私は後悔のしないように生きたい。もしも、寿命が来たか、病気にかかったか、本の主人公のように交通事故で死んでしまって、後悔が残っていても、それを上回るくらい「幸せだった」と思えるような生き方をしようと思う。ケンカをしたらその日のうちに仲直りをする事や、出された宿題はスマホを触る前に片付けることや、部屋の掃除はこまめにする事など、ほんのちょっとだけ気にして動こうと思う。簡単に「死」について言って良いものではないと思うがこの本を読んだ良い機会なので少し真面目に考えてみた。やはり、最後に言えるのは「明日やろうは馬鹿野郎」だということだ。



家族の形

電子制御工学科3年 森 洋 基

「本当の親じゃないのに、と言われカッとなって首を絞めた」小学四年生男子が義理の父親に殺された。「ゆるしてください」と訴えながらも、両親に虐待されて五歳の女の子が死亡した事件。親子関係における悲惨な事件が起こるたびに私はとても心が痛む。

たまたま本屋に立ち寄った時、帯表紙にある「血のつながらない親の間をリレーされ、四回も名字が変わった森宮優子十七歳。だが、彼女はいつも愛されていた。」という見出しに興味を惹かれてこの本を読んでみた。

血のつながらない親との生活という言葉から、波乱万丈な彼女の人生をイメージしたが、「バトン」というワードにとっても深い意味を感じ、読み終えた後には

暖かい気持ちになった。特異な環境でありながらも、明るく前向きに生きる彼女の人生が淡々と柔らかに語り進められ、あつという間に読み上げてしまった。

主人公の優子が自分の意思とは関係なく親の都合で三人の父親と二人の母親に育てられていく物語である。血のつながりがない親子でありながらも、どの親も一生懸命優子にありったけの愛情を注いでくれた。優子の高校の担任の向井先生が卒業式の日にくれた手紙に、それを証明することが書かれている。「あなたみたいに沢山の愛情を注がれている人はなかなかいない」と。

私の印象に残っているのは、優子が高校生の時から三番目の父親となった森宮さん。父と娘のほのほのと

した日常会話はどこか心をほっとさせてくれた。優子のためにせっせと作る男料理。始業式には必ずカツ丼。優子が元気がないときには何日も続く餃子。朝から食べるカツ丼も十七歳の女子高生にはしんどいときもあっただろうが、それ以上に父親の愛情をかみしめていたことだろう。また、高校の合唱祭の前夜にピアノの練習をしていると、父の森宮さんがいつの間にか覚えていた合唱曲を歌ってくれ、優子の練習に付き合ってくれる場面。娘を想う父の思いが、私にも伝わってきた。たくさんの愛情を注がれて育った証として、「今より大事にすべき過去など一つもないのだから」という優子の言葉がとても印象的だった。もし自分が同じ環境に在ったら、どう



いう生き方をするだろうか。

この本を読んで、私は親子でいえば血のつながりだけが愛情ではない、小さな子どもであろうとも一人の人として相手を尊重し大切にすることが、ひとつひとつ積み重なって信頼や絆をつくりあげていくものだと、切実に感じた。

私も十八歳。あと二年もすれば成人式を迎え、社会人となる。人は一人で生きられない。私は昨年、西日本豪雨において、人とのつながりの大切さを、身をもって実感した。将来家族もできるだろう。

これから自分と関わっていく全ての人達を尊重し、思いやりを大切にして信頼を築いて生きていきたい。更にはひとりひとりが、このことに気づいて、優しい社会になることを願う。



命の優劣

流通情報工学科3年 行友光葵

最近の人々は命を軽く見ているとつくづく思う。飛び降り自殺を図ろうとしている者に対し「早く飛び降りろ」と言わんばかりにカメラを向ける。匿名だからとインターネット上で平気で暴言を吐く。そんな環境にいるうちに私も気づけばSNSに心無いコメントを書き込んでしまっていた。

そんな中、「センタクシテクダサイ」という一冊の本に出会った。政府がある高校のクラスを対象に、命の重みを分らせるための実験を試みる。「センタク者」に選ばれた者は、一時間以内に「A」もしくは「B」の人物を殺さなければならず、どちらかを選ばなかった場合はセンタク者が死ぬという物語である。センタク者になった者は、A、Bのどちらかが友達や恋人であろうと自分の命が惜しいがためにボタンを押す。私はセンタク者に対し「なぜ仲良くしていた大切な人を殺すのか。人を蹴落としてまで自分が助かりたいのか？」と怒りの疑問を覚えた。しかし、私はあることに気づいた。フィクションであり第三者が見てい



るからこそそう軽々と綺麗事が言えるのだと。私は実際に自分がセンタク者になった場合のことを考えた。私も結局、センタク者と変わらない判断をした。自分を一番考えてしまっていた。物語の中のセンタク者がA、Bどちらかを選んでいく中、一人の女性が流れ

を変えようとする。このゲームはまちがっている。命の大切さが人を殺すことでわかるはずがないでしょ？」

「人の命が天秤にかけられることなんて、あってはならないの。」

「だから私は、ボタンを押さない。絶対に」と述べたのだ。私は彼女に対して反論することができなかった。全くその通りだと思ったからだ。どんな人間であれ、みんな同じ命。命の重さに変わりはないのだ。「この人は私より劣ってる

し、みんなから嫌われているから殺しても良い」と人の命に価値をつける資格は私たちにはないのだ。この物語のセンタク者たちは他のセンタク者もどちらかを選んでいくから自分も選んでも別に構わないだろうと

いう風潮を作り上げていた。そう、これがまさに SNS の光景そのままなのだ。他の人が暴言コメントを残しているから私が一人残したとて何か起こるわけではないと同調が同調を呼んでいく。批判された人が死んだとしても、他のみんなもやっていたと逃げ道を作る。この作品は命の尊さを教えてくれるだけでなく、現代人に対しての風刺も入れていると私は感じた。

私はこの作品を通して命に対する思いが格段に変わった。以前までは SNS 等でコメントをする時、言

論の自由などと無理矢理こじつけ好き放題言っていた。言われた側の気持ちを考えていなかった。だが作品を読んでからは、「今しようとしていることは誰かを傷付けてはいないか？」と一度歯止めをかけ、自分を客観視し判断できるようになれた。判断ができるようになったことで、周りが良く見えるようになり人に対する対応が少々だが改善された。

私はセンタク者の流れを変えた彼女の考えを継ぎ、これから、言動や行動をよく考えて生きていきたい。



「ニワトリは一度だけ飛べる」を読んで

流通情報工学科 1 年 松井映樹

私は、重松清の「ニワトリは一度だけ飛べる」を読んで、人間の一人一人の悩みや現代社会の闇について考えるようになりました。

「ニワトリは一度だけ飛べる」という本は、二十一世紀になりかけた日本が舞台となっています。とある冷凍食品会社で働いていたが、転勤を断ってしまったせいで、左遷部署である「イノベーション・ルーム」という通称「イノ部屋」「リストラ部屋」に異動となった主人公、酒井裕介はある日「ニワトリは一度だけ飛べる」という一通のメール受け取りました。内容は、「ニワトリはピンチになると力をふりしぼって、思い切り空高く飛ぶ。」というものだったり、童話のオズの魔法使いの登場人物になぞらえて、酒井を「臆病なライオン」と名付けたり、他二人のイノ部屋送りの羽村と中川を「知恵のないカカシ」や「心を失くしたブリキの木こり」というなど、意味深なメッセージばかりでした。さらに、差出人は不明。しかし、物語が進むにつれ差出人の正体や意味深なメッセージの真相、そして会社の改ざん事件や陰謀が明らかになって来ます。

そして、オズの魔法使いのようにライオンの酒井、カカシの羽村、ブリキの中川の 3 人は会社の問題の内部告発を目指し、魔女である営業部長達に立ち向かっていきます。



私がこの物語で感動した所は二つあり、一つは、登場人物達一人ずつに悩みや苦しい体験があるという所です。例えば、主人公の酒井には、すべて上手くいかないという悩みがあったり、「仕事は大事だけど、好きなわけじゃない」という臆病な考え方があります。また、中川には体の部分がブリキとなって心を失い、恋人を思う気持ちがなくなった木こりのごとく、なにかかも全てを愛しすぎたために、なにかを愛する心のすべてを失ってしまったという所も痛ましい出来事の一つです。

そして、二つ目はメールに送られてきた、一つの文章に感動しました。それは、「信じられるかどうかではなく、信じるかどうか」という所です。解釈すると、「始めから無理だと恐れて諦めるよりも、自分からやれると信じてやってみるのが大切」という文になります。これは、物語において悪に立ち向かう三人のことを指していますが、なんとピンチに追い込まれて一回のみ信じてはばたくニワトリにもつながっていたという所に驚きが隠せませんでした。

将来、私はいずれ働くことになります。その時に、ただ学力だけでなく社会で取りまく人間関係や、事件や問題も発生するということがあるかもしれません。悩みも生まれてくるかもしれないし、時には人間関係を犠牲にしなければいけないかもしれません。

本当の「働く」ことや、社会の「闇」についてこの本は教えてくれました。

トピックス

ビブリオバトル in 広島商船を行いました

令和元年10月7日(月) 図書館内のラーニング・コモンズにおいて、初めての開催となるビブリオバトル in 広島商船を実施しました。ビブリオバトルは参加者が本を紹介し、「どの本をよみたくなったか」を基準に参加者が投票をする書評形式のゲームです。5名の発表者による本の紹介の後、参加者10名による投票により、チャンプ本には流通4年の立花怜恩さんの紹介した「本田宗一郎100の言葉」が選ばれました。



当日の発表の様子

【紹介された本】

別冊宝島編集部「本田宗一郎100の言葉」／池上彰「知らないと恥をかく世界の大问题2」／岩崎夏海「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」／道尾秀介「向日葵の咲かない夏」／湊かなえ「リバース」

この催しは全国大学ビブリオバトル2019の予選を兼ねており、立花さんは11月3日(日)に広島県情報プラザで開催された中国Dブロック地区決戦に参加しました。残念ながらチャンプ本こそ逃しましたが、広島商船高専の代表として大健闘されました!!



地区決戦での立花さん



アンサンブル・スピカとお手伝いいただいた学生の皆さん

第11回広島商船ミニコンサートを開催

令和元年12月7日(土) 14時より、図書館棟2階の視聴覚室において、第11回目となる広島商船ミニコンサートを開催しました。例年と同じく、「アンサンブル・スピカ」の皆さんをお招きし、38名の来場者がフルート、クラリネット、ピアノによる「アラジン」「故郷」などの演奏に約一時間耳を傾けました。

この催しは本校と地域との交流活性化を目的に毎年開催しています。前日・当日に学生会・吹奏楽同好会などの有志の学生の皆さんに会場設営、当日の受付・駐車場案内に協力いただきました。

◆◆◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆◆◆

毎年恒例の校内作文・表現コンクールの今年度の結果と受賞作品を掲載しました。それぞれ個性のある力作揃いと感じました。作品審査や運営でご協力いただいた教職員各位にお礼を申し上げます。図書館では勉学のための資料の提供に加え、ビブリオバトル、ミニコンサートといったイベントでの体験を通じて、皆さんの学生生活が一層充実したものになるよう、これからもお手伝いしてゆきたいと思います。

◇編集発行：図書館運営委員会（令和元年度）：風呂本武典（図書館長・流通情報工学科）・山下航正（一般教科）・清田耕司（商船学科）・田上敦士（流通情報工学科）・峠正範（電子制御工学科）

◇〒725-0231 広島県豊田郡大崎上島町東野4272-1 / TEL：0846-67-3007

◇ホームページ：<http://www.hiroshima-cmt.ac.jp/facility/lib.html>